

氏名	受験番号

一、次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

「ぼく」の妻（今日子）は病気の治療のため入院している。「ぼく」は、二人の子どもたち（ミライとアスカ）を連れて母（たーちゃん）の家に来た。」

たーちゃんの家に到着したのは、その日の午後早い時間帯だった。

家から道を挟んで向こう側にある雑木林がざわざわと音を立てていた。

①木立の中の大きなケヤキが、空を掃く音だ。瑞々しい緑の視覚的効果と相まって、やはり梅雨だなんて信じられなくなる。庭で遊んでいるミライとアスカに、ぼくはそのことを指摘したくて縁側に腰掛けている。でも、さっきから二人は放し飼いになっているニワトリに夢中で、声をかけても振り向きもしない。

そこで、

「あのなあ、鳥つてのは実は恐竜なんだぞ」と気を惹きそうなことを大声で述べてみた。

ミライがこつちを振り向いたが、ほおつというかんじで口を丸めただけで、またニワトリを追う。しかし、ニワトリつてそんなにおもしろいのか？ ぼくにははなはだ疑問なのだ。

ニワトリは首を前後に鋭く揺らしつつ、aノドをぐるぐると鳴らして歩き続けるだけだ。まるで自動機械のように定まった行動で、退屈きわまりない。

「あら、二人ともパパとそっくりねえ。パパも小さい頃は、ニワトリが大好きだったのよ」

たーちゃんが言つて、ぼくは自分の中の疑問を、「ニワトリつておもしろいのか」というものから、「なぜ自分は忘れてしまったのか」ということ②座標変換しなくてはならなくなってしまった。

ぼくの実家であるたーちゃんの家は、築三十年近い一軒家で、首都圏とはいえ駅からバスで三十分かかる、いわば陸のbコトウだ。地元の中ではかなり裕福とされる「ニュータウン」なのだが、その実、五年前に亡くなったおやじの生命保険で、住宅ローンを清算したことをぼくは知っている。高度経済成長期を生きたサラリーマン家庭で、真の意味で余裕があったところなんてきつとないのだ。

とはいっても、庭は広い。購入当時、同じブロックにゴミ捨て場があったため、地価が安かった分、周囲に比べても広い。

③たーちゃんは、ぼくが子どもの頃から、ここでニワトリを飼っていた。ニワトリは餌は与えられているものの、地面をつついてミミズをついばんだりする程度にはワイルドで、今も昔も元気に育っている。最近ではたーちゃんは、卵を一人ではcシヨウヒしきれず近所に配ったり、ぼくの家に来る時にまとめて持ってきたりしている。

ミライとアスカが歓声をあげながら家の中に戻ってきた。それぞれが両手の中に汚れた卵をまるで宝石のように包み込んでいた。

「たーちゃん、タマゴゴハンにしてほしいぞー」とミライが言つと、アスカもはしゃいで、「あーちゃんも！」と言いながら跳びはねる。二人とも、最近、ぼくが作る粗雑な料理に慣れて、炊きたてのご飯に鶏卵をぶっつけただけのタマゴゴハンが大好きだ。たーちゃんはそういうのを料理とは認めていない。ぼくのことをきつと睨んだけれど、④こつちはいわば確信犯なのでそつぽを向いて口笛なんぞを吹くのだった。

遊びが一段落すると、家にひとっだけある畳の部屋にミライとアスカを呼んだ。五年前に買った仏壇があって、中にぼくの父親の位牌いはいと写真が飾つてある。さらに背景には、父方の祖父母、母方の（つまり、たーちゃん側の）祖父母の遺影も配してあるから、家系図いへというか、曼荼羅まんぢらのような雰囲気でもあった。ぼくはこのあたりに、たーちゃん独特のセンスを感じざるを得ない。はつきり言つて、趣味が悪い。

ミライとアスカが、洗面所で洗つてタオルできれいに拭いた卵をころりと位牌の前に置いた。卵は父の大好物だった。それも産みたての有精卵でなければというこだわりで、だからこそ農家でもないのに庭でニワトリを飼いはじめたのだ。

お行儀よく仏壇の前で手を合わせる。我々はこういう時だけ、どうしようもなく仏教徒なのである。

国語 一

氏名	受験番号

「たーちゃんのじーじは、ミライが生まれてすぐに亡くなったんだ。きょうはじーじが亡くなって五年目なんだよ」
「じーじ、ごちゃい？」アスカがすかさず聞いた。

去年の命日は今日も一緒に四人で来たのに、今年は三人だけだ。でも、その時はまだ満足に言葉が出ていなかったアスカが「じーじ」とはつきり言う。嬉しくもあるし、今日子がいなくて残念でもあるし、^⑤複雑な感情がぼくの中で渦巻いている。

「そうよ、じーじは、死んでから五歳」たーちゃんが訳のわからない説明をする。脇で、ミライはじっと仏壇を見つめたままだった。

「どうした、ミライ」

「とうちゃん、うえのひとってなんだ」

上の人……。『曼荼羅』の上の方の写真のことを言っているらしい。

「たーちゃんのお父さんお母さんと、じーじのお父さんお母さんだ」

「みんな、しんでるんだよな」

「そうだ。もうずいぶん前に亡くなった」

「じゃあ、みんなカセキなのか？」

ぼくは思わずうなり声をあげた。

「化石、じゃないな。でも、昔の人だ。化石は大昔の生き物じゃないとならない」

「そうかあ」

ミライはうなずいてまた黙り込んだ。まあ、ハードボイルドな園児だから仕方ない。

ほどなく夕食になって、子どもたち希望のタマゴゴハンが食卓に供された。

湯気を立てる炊飯器からかわいらしい二つの茶碗ちawanに白飯をよそい、その上に産みたての卵を割って落とす。黄身がぶるると。燗かまえて、実に美味うまそうだ。

ミライの卵に赤い染みがあった。

「あ」と言って、たーちゃんが箸はしの先でつまみ上げ、捨てた。

「なんだあ」とミライ。

「卵をずっと温めてたら何が生まれる？」

「ヒヨコ」

「赤いのは小さなヒヨコなんだ。ニワトリがずっと温めているとあれがだんだん大きくなってヒヨコになる。今のは死んじやつただけだよ」

ちゃんと説明したはいいものの、どんな反応をするのか^⑥ぼくはドキドキしてしまう。生と死にかかわることに、ぼくの方が妙に敏感になっている。

「そうなのかあ、小さなヒヨコなのかあ」

ミライはそう言っただけで、黙々とタマゴゴハンを口に運んだ。食後のデザートまで一気に進むと、昼間見た*地下街のアンテナイトのことをたーちゃんに話し始めたから、もう「小さな赤いヒヨコ」のことなど、忘れてしまったのだと思った。さっきまでの無口さとは裏腹に、子どもらしい笑い声をあげている。

「カセキってすごいぞ。キョウリユウだってカセキなんだぞー」

「そうねえ、恐竜は化石よね」

「おにいちゃんが、いつってたぞ」

ぼくはぼくとして目を上げた。おにいちゃんというのは、最近、ミライがよく口にする近所の子で、なのにぼくは会ったことがない。

「おにいちゃんって、どこの子なの」とたーちゃんが聞き、ぼくはA聞き耳を立てた。

「おにいちゃんは、おにいちゃんだぞ。でも、キョウリユウにくわしいぞ。トリケラトプス、プロントサウルス――」

国語 三

受験番号	
氏名	

「ミライ、それはちがう」ぼくは割り込んだ。
「プロントサウルスというのは古い名前だ、今はアパトサウルスって言うんだ」
実は元恐竜少年であるぼくは、そのあたりのことに詳しい。

「まあ、いいじゃないの、そんなこと」とたーちゃんが諫めて、ぼくはB「矛をおさめた。たぶん、その「おにいちゃん」は古い図鑑かなにかを持っているのだらうけれど、それにしても知識が古すぎた。ひよっとすると、体の大きな雷竜は沼地で生活していたなんて間違った知識をミライに刷り込んでしまうかもしれない。⑦そんなことを嫌がっている自分がおかしくもあり、それでもやっぱり嫌なものは嫌なのだった。

(川端裕人『てのひらの中の宇宙』より)

*注 地下街のアンモナイト … この日、「ぼく」とミライとアスカは、地下街の舗装に使われている天然石の中にアンモナイトの化石が埋もれているのを見つけて楽しんだ。

(句読点や符号は、すべて一字分と数えて解答しなさい。)

問一 線 a～e のカタカナは漢字に、漢字はひらがなに直せ。



問二 線部 A 「聞き耳を立てた」・B 「矛をおさめた」の意味として、最も適切なものを次の中からそれぞれ一つ選び、記号で答えよ。

問三 線①「木立の中の大きなケヤキが、空を掃く音だ」に用いられている表現技法として最も適切なものを、次の中から一つ選び、記号で答えよ。

- ア 直喩 ちよくゆ イ 擬態語 ウ 擬人法 エ 体言止め オ 対句法

問四 線②「座標変換しなくてはならなくなってしまった」とあるが、なぜか。その理由を説明した次の文の I ．
II にあてはまる語句を、それぞれ指定字数で文中から抜き出して答えよ。

今の「ぼく」にとってニワトリは I 八字 が、 II 十七字 と聞かされたから。

国語 四

氏名	受験番号

問五 —— 線③「たーちゃんは、ぼくが子どもの頃から、ここでニワトリを飼っていた」とあるが、そのきっかけを説明した一続きの二文を文中から抜き出し、最初の五字を答えよ。

問六 —— 線④「こっちはいわば確信犯なので」とはどういうことか。その意味として最も適切なものを、次の中から一つ選び、記号で答えよ。

ア ミライとアスカが卵を見つけ出すことが「ぼく」にはわかっていたということ。
イ タマゴゴハンがミライとアスカの好物だと「ぼく」は知っていたということ。

ウ 「ぼく」はたーちゃんの好みにかかわらずタマゴゴハンが好きだということ。

エ 「ぼく」はたーちゃんの批判を覚悟でタマゴゴハンを作っていたということ。

問七 —— 線⑤「複雑な感情」とはどのような感情か。それを説明した次の文の I・II にあてはまる語句を、それぞれ指定字数で文中から抜き出して答えよ。

去年の命日に比べて、今年は、I 十字 II 十六字 ことが嬉しくもある感情。

問八 —— 線⑥「ぼくはドキドキしてしまう」とあるが、なぜか。その理由として最も適切なものを、次の中から一つ選び、記号で答えよ。

ア ヒヨコが死んだことを説明したので、ミライがショックを受けていないか心配しているから。

イ ニワトリの生殖のしくみを説明したので、ミライが正しく理解できたのか心もとないから。

ウ ちゃんと説明したつもりだが、「ぼく」には答えられない質問をされなにか緊張しているから。

エ 生と死にかかわることを説明したのに、ミライはこれといった反応を返さなかったから。

問九 —— 線⑦「そんなこと」とはどういうことか。その内容として最も適切なものを、次の中から一つ選び、記号で答えよ。

ア 最近、ミライがよく名前を口にする近所の子に、「ぼく」は会ったことがないということ。

イ 昔はプロントサウルスと呼ばれていた恐竜が、今はアバトサウルスという名前になったということ。

ウ 一見したところ恐竜に詳しいはずの子が、雷竜についてだけは持っている知識が古すぎるということ。

エ 「ぼく」の知らない子が、ミライに間違った知識を刷り込んでしまうかもしれないということ。

国語 五

氏名	受験番号

二、次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

かつて学生だったころ、生理学者・橋田邦彦が、さかんに「科学する心」を強調したのを、ぼくはいまでもよく憶えている。

①「科学する」という日本語が、何とも奇妙にきこえたからである。当時、彼は、たしか文部大臣だったが、文相たる者がこんなヘンな日本語を使っているのか、と思ったのだ。「科学する」なんて日本語としては破格であり、「科学を学ぶ」でなければならぬ、と。

しかし、いまにして考えてみれば、それはたしかに耳馴れない用法だったが、べつに破格だったわけではない。なぜなら、日本語には、②じつに便利な「する」という動詞があり、それが何にでもくっつくからである。じつさい、「する」という日本語が、いかに X であるかは、こころみに辞書を引いてみれば、びつくりするほどだ。

A 『広辞苑』の用例を一瞥すると、そこには「音がする」「頭痛がする」「働かせる」「子供を医者にする」「朝食はパンにする」……など、じつにさまざまな「する」の用法が列記されている。とうぜん、この言葉は、いともかたんに形容詞や副詞にもつき、それどころか、外国語にさえ容易に合体するのである。だから、日本人は、どっと入ってきた漢語を片端から取り込み、それを『自家薬籠中』のものにし得たのだ。

「a ジュクリヨ」する、「警護」する、「激怒」する、「読書」する、「約束」する……現在、ぼくらが日常的に使っている言葉の大半は、そうした「する」のおかげだと言つてよい。

B 冠詞、性別、単数・複数にこだわらず、それらによる動詞の変化も必要としないためだ。

こうした日本語の構造が、外国語の輸入を大いに容易にした。そこで明治になると、こんどはヨーロッパ語がつきつきに流入して「和製漢語」に置き換えられ、さらに第二次大戦後はアメリカ語が手当たりしだいにカタカナに移されて「和製英語」が氾濫することになったのである。そのすべてが「する」という便利な一語にかかっていたのだ。

つい最近、私は朝日新聞（一九九七年六月三日付夕刊）の一面に③「アセスする」という見出しが躍っているのを見て、いまさらのように「する」の b コウノウに感嘆した。アセスとは、いうまでもなく英語の assess——すなわち、評価する、査定する、の意味である。それなら、日常語として通用している日本語をそのまま使えばいいのに、わざわざ「アセスする」などと表現するのは、さきの「科学する」以上に、奇異なことではないか。

しかし、この場合は、品物や成績などの査定、評価ではなくて、周囲の自然環境がどのような影響を受けるのか、それに関する査定、評価であるところから、わざわざ「アセスする」と、見出しに使ったのかもしれない。だが、新聞の読者が、そんな意味をすんなり理解できたとは、とうてい思えない。みんなで考えなければならぬ大事な問題について、新聞がこのような外来語を勝手な用法でつたえる——ぼくは、これに、日本における「哲学」の不毛と、少なからず関係しているのではないかと、思わざるを得なかった。

というのは、いとも簡単に外国語を借用できるということは、新しい観念を獲得する上で大いに役立つと見ることができ、が、反面、受け入れた言葉は一知半解にとどまり、数多くの誤解を生み出すことになるからである。そして、そのあげく、思考そのものを、きわめてあいまいなものにしてしまうのだ。

わかってもいないのに、わかったように思い込む、これが思考の最大の敵である。だが、④日本人はいともやすやすと、いや、みずから進んで、その「敵」の術中に陥ってしまう。

〔中略〕

それにしても、「アセスする」と使えば、一般の読者の環境意識が明確になるのであろうか。むしろ、Y のまま、何となくわかったようになつて、ただ感覚的に受け取るぐらいが関の山であろう。だとすれば、こうした言語状況は、奈良時代も現代も、ほとんど変わっていないということにならう。

国語 六

受験番号	
氏名	

奈良時代に輸入された中国語（漢語）の d 調聲は、千年以上の歴史のなかで日本語化されてきた。おなじように現在さかんに使われているカタカナ語も、長い年月のうちには日本語になっていくだろう。けれど、借り物はあくまで借り物である。^e「チュウシヨウ的な観念が『外注』である以上、日本人は自分の言葉によって、果して「創造的観念」を生みだすことができるのだろうか。ぼくには、たいへん心もとなく思われて仕方ない。

（森本哲郎『ぼくの哲学日記』より）

（句読点や符号は、すべて一字分と数えて解答しなさい。）

問一 ——— 線 a ~ e のカタカナは漢字に、漢字はひらがなに直せ。

問二 [A] ・ [B] にあてはまる最も適切な言葉を、次の中からそれぞれ一つ選び、記号で答えよ。

- ア さらに イ だから ウ たとえば エ しかしながら

問三 [X] ・ [Y] にあてはまる言葉の組み合わせとして最も適切なものを、次の中から一つ選び、記号で答えよ。

- ア X 融通無碍^{むわげ} Y 一石二鳥
 イ X 融通無碍^{むわげ} Y 意味不明
 ウ X 天衣無縫 Y 一石二鳥
 エ X 天衣無縫 Y 意味不明

問四 ——— 線①「科学する」という日本語が、何とも奇妙にきこえた」とあるが、筆者はどのように言うべきだと考えたのか。文中から五字で抜き出せ。

問五 ——— 線②「じつに便利な「する」という動詞」は、どのような効果をもたらしたと筆者は考えているか。これを説明した次の文の [I] ・ [II] にあてはまる最も適切な言葉を、それぞれ指定字数で文中から抜き出して答えよ。

- [I] 八字 ことによって、 [II] 十三字 したという効果。

国語七

氏名	受験番号

問六 線③「アクセスする」という見出しを見て、筆者はどのように感じたか。その内容をまとめた次の文のⅡにあてはまる最も適切な言葉を、それぞれ指定字数で文中から抜き出して答えよ。

特にⅠ二十一字に関する査定、評価を表そうとしたのかもしれないが、それは新聞のⅡ五字だと感じた。

問七 線④「日本人はいつもやすやすと、いや、みずから進んで、その敵の術中に陥ってしまう」とあるが、どういうことか。次の文のⅠにあてはまるように、四十字前後で答えよ。

日本人は、日本語の中に外国語Ⅰということ。

三、次の各文の□に漢字一字を入れて、線部の三字熟語を完成させよ。

例 これまで長らく交渉を重ねてきたが、ここからが□念場だ。 正(念場)

- ① 卒業後の□写真を描く。
- ② 彼女は無□作に髪をかき上げた。
- ③ 一日を有意□に過ごした。
- ④ あまりに仕事に□辺□では、身体が心配だ。
- ⑤ 今度の試合は新しいチームにとって試□石となるだろう。